

平成17年5月の解説（週間天気予報）

【5月の天候状況】

低気圧が北日本を通過することが多かったことから、北日本では曇りや雨の日が多くなり、東・西日本では移動性高気圧に覆われて晴れる日が多くなりました。一方、南西諸島では上旬に梅雨入りした後、梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多くなりました。上空に冷たい空気を伴った低気圧が通過した12日、15日、23日～24日及び27日には北・東日本の広い範囲で大気の状態が不安定となり各地で雷雨となりました。月を通しての日照時間は北日本と南西諸島では少なく、東・西日本では多くなりました。降水量は、ほぼ全国的に少なく東・西日本では平年の40%未満となったところがありました。月平均気温は北日本、東日本で低く北海道では平年より2℃以上低いところがありました。一方、西日本と南西諸島では平年より高く、1℃以上高いところがありました。

【5月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は全国平均では例年（注）より5ポイント高い73%でした。特に四国、九州北部地方では例年より12ポイント高くなりました。最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は全国平均では例年より0.3℃小さい2.7℃で、特に北陸、近畿地方では例年より0.4℃から0.5℃小さくなりました。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差は全国平均では例年より0.3℃小さい1.8℃で、特に東北地方では0.5℃小さく、中国、九州北部、沖縄地方では0.4℃小さくなりました。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【5月の週間天気予報から】

5月18日から19日にかけて低気圧が発達しながら日本海からオホーツク海へ進み、これから延びる寒冷前線が19日に本州中部を南下して、北陸地方、東海地方や長野県では雨が降りましたが、関東地方ではほとんど降りませんでした（図1）。寒冷前線が関東地方を南下する場合、通常、山岳地帯（関東山地等）の風下となるため前線が弱まってほとんど雨が降らないことが多いのですが、前線上に小さな低気圧が発生する場合には関東地方でも広い範囲で雨が降ります。

14日（予報対象日の5日前）の段階では、寒冷前線（図2の青線）が南下するとともに、本州南岸（図2のAの部分）に小さな低気圧が発生して、関東地方を含む本州中部の広い範囲で雨が降ると予想し、関東地方で雨が降る予報を発表し

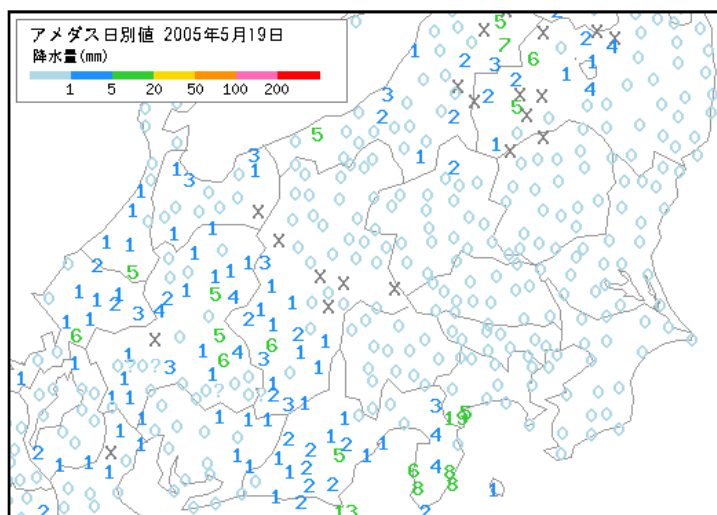


図1 アメダス観測による日降水量 2005年5月19日

ました。その後 16 日（同 3 日前）の段階までは予報内容を変えるような大きな変化がありませんでしたが、17 日（同 2 日前）になって、前線上に低気圧が発生しない可能性が高くなったため、この日に発表した 19 日の天気予報では関東地方で雨が降らない予報に変更しました。実際の地上天気図（図 3）では、前線上に低気圧は発生しませんでした。

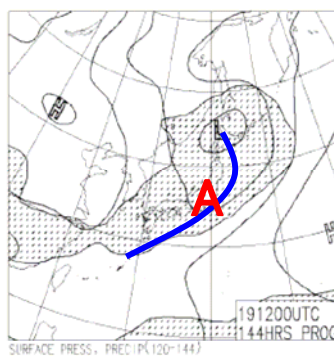


図 2 14 日に発表した
19 日 21 時の予想地上天気図

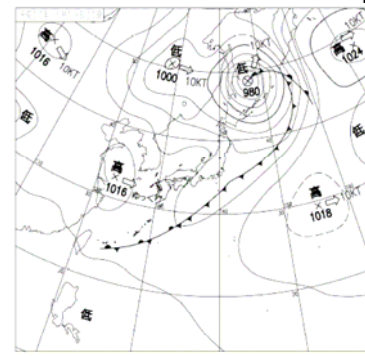


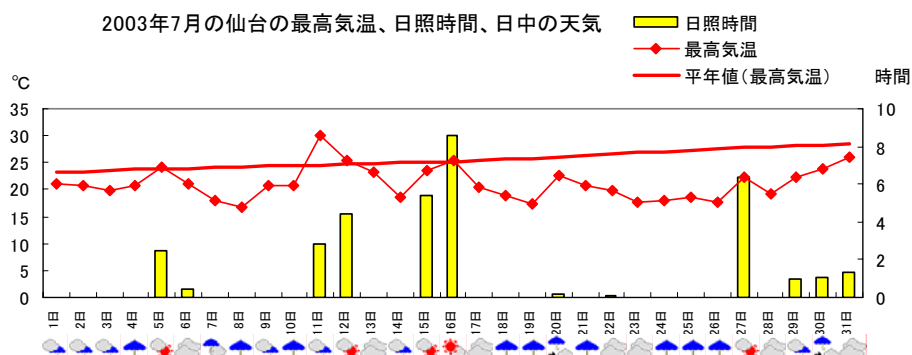
図 3 実際の地上天気図
(2005 年 5 月 19 日 21 時)

このように、寒冷前線の動きが 1 週間程度前からほぼ予想できた場合でも、実際の天気に大きく影響する小さな低気圧の発生の予想が困難なことが、週間天気予報を難しくしています。

【7 月の週間天気予報の利用にあたって】

例年、7 月の下旬頃に全国各地に大雨や長雨をもたらしていた梅雨が明けて、全国的に太平洋高気圧に覆われて晴れて暑い日が続くようになりますが、梅雨明けの時期はその年によって大きく違います。この時期に低温や寡照（日照時間が少ない）の日が続くと農作物等の成長に悪影響を与え、しばしば北・東日本の太平洋側では冷害となることがあります。

2003 年には東北地方を中心に低温、長雨、日照不足等のために水稻、野菜、果樹などに大きな被害が発生しました。この年、東北南部地方では平年並の 6 月 12 日頃に梅雨入りしました。平年の梅雨明けは 7 月



23 日頃ですが、仙台ではこの年、7 月 23 日以降も曇や雨の日が多く最高気温も 20 度を下回るなど平年より低い日が続き、7 月の平均気温が観測開始以来の低い記録を更新しました。その後 8 月になっても曇りや雨の日が多かったため、この年は東北地方の梅雨明けの時期を確定できませんでした。7 月に週間天気予報で曇や雨の予報が続く際には、気温の予報にも注意し、早めに冷害等への対策を検討することをお勧めします。